「まち」が変わる!? 自治基本条例③

尚美学園大学准教授・真下英二さんによる「自治基本条例連続講座」の内容をまとめたものです。

政策企画課 ☎224-5503

自治基本条例の目的は、参加と協働に基づく、自治体と市民との関係を再構築することです。でもそれを達成できるのは、自治基本条例だけなのでしょうか。市の策定する総合計画などで「参加と協働」の仕組みは実現できないのでしょうか。

あえて自治基本条例とする理由は何か、最終的に達成される市の姿は何かということが最初に必要です。誰のための、何のためのものか、ということは絶対に外せません。この条例は、あらゆる市民が影響を受けます。だからこそ、価値あるものにしなければならないのです。

自治基本条例の制定を通じて、市のあるべき姿を考え直し、住民自治を拡充する。制定後は、より現代的な課題を市民と自治体が一体となって解決する。そうでなければ作る価値はないと思います。

BOOK NAVI 本の面白さを感じてみよう

中央図書館 ☎222-0559

ある一つのテーマに沿って、絵本や読み物、知識の本などを幅広く紹介しているブックトーク。子供たちに本の面白さを伝える取り組みです。図書館では、市内の小学3年生を訪問し、ブックトークを行なっています。

紹介するテーマや本はさまざまです。そのうちの一冊に「鳥のなき声ずかん」（藪内正幸／ぶん・え　篠原栄太／もじ　佐藤聡明／おと　福音館書店）があります。この本では、写真と見間違うほど丁寧に描かれた鳥の絵とともに、鳥の鳴き声がそれぞれの特徴を表したかのような字体で表現されています。表紙の裏側と巻末には鳴き声の楽譜と詳しい解説も付いていて、「実際に鳴き声を聞いてみたらどんなだろう」と想像が膨らみます。

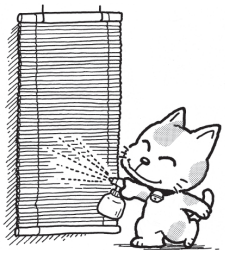
この本を紹介すると、子供たちは、「この鳥は家でも飼っているよ」、「鳥の絵は写真だと思った」、「鳴き声の楽譜をもっとよく見てみたい」と興味津々。ブックトークが終わり、教室を出るとき、「もう終わりなの？」、「楽しかった、また来てね！」と声をかけてくれる子供たち。あなたも図書館で面白い本を探してみませんか。

楽しみながら涼を求める　先人の知恵に学ぶ

環境政策課 ☎224－5866

夏は電力需要が最も多い季節です。春・秋と比べると約50％も増えます。電力の供給不足が心配される今年の夏、電力の消費を抑えて快適に過ごす工夫をしましょう。

●窓際やベランダにすだれを下げたり、よしずを立てかけたりして、日差しを遮りましょう。その際、霧吹きで表面を湿らすと涼しさが増します。



●アサガオやゴーヤなどのつる性植物で、みどりのカーテンを作りましょう。日差しを遮るだけでなく、葉の中の水分が外に排出される蒸散作用で周囲の温度を下げてくれます。

●庭やベンランダに打ち水をしましょう。朝夕の日が高くない時間帯にまくのが効果的です。風呂の残り湯を使うと水を節約できます

●旬の野菜・果物を食べましょう。キュウリ・ナス・トマト・ピーマン・ニラ・オクラ・トウモロコシ・スイカなどの夏野菜には水分やビタミン類が多く含まれているため、体を冷やす効果や、夏バテ防止の効果があります。

●窓際に風鈴をつるしましょう。涼しげな音色に心地よさを感じリラックスできます。

日ごろの節電に加え、さまざまな先人の知恵と工夫に学び、暑い夏を乗り切りましょう。

人権教育シリーズ

児童・生徒の人権作文⑬

平成21年度川越市人権教育実践報告会で発表した小中学生の人権作文を紹介します。

国境を越えて③

高階中学校三年

私は変わろうと思う。どんな国の人とも、一人の人間として接していけるように。人を先入観だけで判断してしまわないように。これは、決して難しいことではないと思う。「外国人」ではなく、「一人の人間」として人を見ればいい。実際、国というのは一人一人の人間が集まってできたものだ。ちょっと考え方、見方を変えるだけで、大きく世界は変わるはずだ。

まずは、身近な世界の見方を変えていこう。学校、クラス、自分が住んでいる地域。このような世界の中で、あなたは一度も偏見で人をとらえたことなどない、と胸を張って言えるだろうか。「あの人は、こういう格好をしているから、きっとこういう人だろう」そう考えたことがなかっただろうか。誰だって一度はあるだろう。その考え方をなくすために、人を外見だけで判断しないようにしていく。それだけでいいのだ。自分の中で、少し意識すれば何かが変わってくるはずだ。

いつか国境を越えて、たくさんの人が手と手を取り合い、笑って暮らしていける世界になると私は信じている。「心の国境」は一人一人の少しの努力で、なくすことができるのだ。

（終わり）

地域教育支援課 TEL224-6086

市長からの手紙

⑫少子化・高齢化

いま、ロバート・D・パットナム著の「孤独なボウリング」という本を読んでいるところです。新聞の広告に載っていた「米国コミュニティの崩壊と再生」という副題が目にとまり、読んでみたいと思いました。副題にあるような問題は、少子化・高齢化が進む日本にとって大きな課題であり、川越も例外ではないと感じたからです。

昭和40年代に市内で建てられた住宅団地は、高齢化が急速に進んでいます。川越では昭和52年に約28%だった14歳までの年少者人口比率は、平成23年5月には約13%に減少しました。一方、65歳以上の高齢者人口比率は約5%から約21%へ、4倍以上も増えています。これは全国的にも同様で、日本全体で高齢化が進んでいます。

高齢化の進行と同じ時期に増えてきたのが、郊外の大型スーパーです。この影響もあり、市街地の八百屋・肉屋などの小売店が無くなり、中小スーパーも撤退しました。その結果、高齢者の中には食料品など生活必需品の買い物が困難になる、いわゆる「買い物難民」が発生するようになりました。また「無縁社会」「孤独死」といった言葉もマスコミの中で日常的に出てくる時代になりつつあります。

核家族化・少子化・高齢化や買い物難民といった社会問題は、戦後、日本が家族主義から個人主義化したことも原因の一つであると、私は推測しています。「個人主義」の先進国といわれる米国や英国は、同じような問題を経験したのでしょうか？　経験したとすればどのように克服したのか、あるいは克服できていないのでしょうか？

読み終わっていないため、「孤独なボウリング」が、この疑問に答えてくれるかどうかは分かりません。少子化・高齢化対策は、市の重要な施策の1つであり、解決していかなければならない問題でもあります。市民の皆様の中で、米国・英国の市民生活や社会状況についてご存知の方はぜひ教えてください。今後の施策のヒントがそこにあるかもしれませんので……。

川越市長　川合善明